

「作文コンクール」入賞・入選作品に見る

昭和と平成の風景

「小さな親切」作文コンクールは今年で45回目となります。

スタートは昭和51(1976)年ですので、

昭和と平成、そして令和と

3つの時代にまたがる運動になりました。

その中から、時代を象徴する作品を紹介し、

昭和と平成を探ってみたいと思います。



昭和時代

今では無くなった他人とのふれあい

第1回の作品集は、A5サイズ

(現在はB5判)。この頃の作品は、

タイトルもシンプルで「やさしいお

ねえさん」のようなストレートなも

のが多く、文章も少々ぶつさらぼう

なものが目立ちます。ただ、それが

かえって、子どもたちの純真な本音

が現れていて楽しくなってきました。

作文の内容を見ると、やはり時

代が現れていました。壁を相手に、

キャッチボールをする少年。受けた

親切を、その場で和歌にして(！)感

謝する老婦人。銭湯で受けた親切

今後は描写されない光景でしょう。

また、誰もがスマートフォンを持

ち歩く現代では、めったになくなり

ましたが、他人に「時刻を聞く」こ

ともよくある光景でした。

現在は便利になった反面、小さな

ふれあいも減ったでしょう。公共の

場で、他人の苦境に気付きにくくな

り、他人に学ぶ機会が少なくなった

ではないかと、若干の危惧を覚えます。



さらに、阪神・淡路大震災や東日

本大震災、集中豪雨、熊本地震な

どの自然災害が相次ぎ、被災体験

を綴ったものも増えました。しかし、

避難所での親切体験から、全国か

ら集まるボランティアの方との交流、

さらには自らがボランティアに参加

した体験など、内容は多岐にわたり、

子どもたちのボランティア意識の高

まりも感じられました。

「うれしかったお年よりの笑顔」

あの日から1週間以上、私の地域では水も電気も使えなかった。やっと給水車が来たのは、4日後。私は、わが家の水くみ当番として、一日に何度も水をもらいに行った。ある日、給水所に行ったとき、また地震が起こった。公民館にひなんしていたお年よりは、ふとんの上でふるえていた。

私になにかできることはないかと、お母さんに相談し、トランプとおはじきを持っていっしょに遊ぶことにした。お年よりは、とびつきの笑顔を見せてくれた。みんなが今、忘れかけていた笑顔がそこにあった。

(要約)

第36回(平成23年度)岩手県 小野寺南美(当時小4)

「私の受けた忘れられない親切」

下校時、みぞれ模様の天気の中、バス停で赤ちゃんをおんぶした女性から、「今、何時かしら」と時刻を尋ねられた。時刻を教えた後、女性が傘をもっていないのに気づき、私は赤ちゃんに傘をさしかけてあやしてあげた。

やがて、自分の乗るバスが来たので、私は女性に別れを告げ車内へ。すると、窓越しにその女性が、バスを追いかけてくるのに気がついた。手には、私がバス停に忘れた、スヌーピーの布袋。

女性は、みぞれの中赤ちゃんを背負ったまま走り、赤信号でとうとうバスに追いついて、「忘れものよ」と布袋を差し出した。私は、申し訳なさいで「ありがとうございます」と答えるのが精一杯。その後、もったいなくお礼を言いたくて、バス停で姿を探したが、会えず仕舞い。布袋を見る度に、奥さんの優しさを思い出す。(要約)

第1回(昭和51年度)宮城県 大森真由美(当時中3)

平成時代

グローバル化とIT化が進み、

多くの自然災害を体験

第13回からは、平成に入ります。

10数年の歴史を経て、文章が練

れてきました。タイトルにもひと工

夫が加わって、思わず読んでみたく

なるものが増えました。「スイミング

スクール」や「テレビゲーム」とい

う単語も登場し、子どもたちの日常

もだいぶ変化したことがわかります。

また、年を追うごとに、外国の方

との交流を綴ったエピソードが増え

ていきます。一方で、「いじめ」が下

敷きになっている作品も現れます。

Best of

親切作文

昭和・平成を通じ、最も涙腺を刺

番伝えたかったことが、感謝と親切

激した作品をご紹介します。

であることに思いを馳せた時、涙が

筆者のおばあさんの置かれた境遇

止まらなくなりました。

「サンタのおじさんが来た」

去年の12月。妹と祖母の三人暮らしの僕の家に、見知らぬおじさんが尋ねてきた。おじさんは、大きなお米の袋を置いて「うちには農家ですから、食べてください」と言った。祖母が、何度名前を聞いても、答えることなくおじさんは去っていった。その夜、いただいたお米をみんなで食べていたとき、76歳の祖母が箸をもったまま言った。

「おばあさんは、一生かかってもご恩返しができない。大きくなつたなら、せめてこの十分の一でも恩返しのできる人間になれよ。」その声はいつもと違っていた。僕は、立派な大人になることを心に刻んだ。

(要約)

第9回(昭和59年度)岩手県 千葉幹広(当時小4)

最後に

今回、過去の入賞・入選作品に目を通しましたが、意外に時間がかかりました。10ページに一度は、子どもたちの純粋な気持ちに泣かされて

しまうからです。今年は世界的に新型コロナウイルスが流行し、人々を脅かしています。それがどのように作品に反映されるのか、苦しみの中でもよい出会いがあると信じたいと思います。